

数独 ひろめびと

新連載

数独の楽しさをいろんな人に伝えて、もっと数独を広めたい。そう思っている、行動に移すのはなかなか難しいもの。そんな中、実際に地域で数独を広める活動をしている人に話を聞き、その苦労ややりがいなどを伺います。今号からの新連載です。題して「数独ひろめびと」。第1回はいきなりの拡大版。岩手県大槌町で、高齢者のみなさんに数独を教えている川上誠さんのご登場です。



「集会所
ぬくろハウス」での川上誠さん

●第1回
川上 誠さん

みんなが楽しんでいる。

岩手県の三陸海岸にある大槌町。「ひょっこりひょうたん島」のモデルとされる蓬莱島などがあって風光明媚な町ですが、2011年3月11日の東日本大震災で発生した津波により、当時の町長が犠牲になるなど甚大な被害を受けました。その大槌町で高齢者自立支援活動を続けているのが、川上誠さんです。川上さんは東京在住で、高齢者自立促進活動として「生涯学習」「多世代間交流」、そして「社会貢献－世界の恵まれない子供達へ」の活動も行う特定非営利活動法人「ソーシャルハーツ」を息子さんと設立。そのおもな活動として、大槌町で元気な高齢者たちを対象に「生涯学習」の一環として「数独」を取り入れているのです。今回、私④は川上さんに密着し、いくつかの集会所での様子を見学しながら、ときどきいっしょに数独を教えたりしてきました。

2017年1月6日の正午前、JR釜石駅前前で川上さんと合流。今回の取材には、ニコリスタッフで日本数独協会（裏表紙の前のページ参照）理事でもある⑤や、ソーシャルハーツ関係者、さらにときどき飛び入りで本誌発行人の⑥も同行。なかなか賑やかな一行となったのです。私や後は当日朝の新幹線で岩手入りしたのですが、川上さんは自家用車で約半日かけて到着。現在は2週に1回のペースで大槌町まで往復していて、それだけでも大変さがうかがえます。

我々は、川上さんの車で大槌町へ。本来ならば釜石から大槌方面へはJR山田線が走っているはずですが、津波で線路が流されて現在も不通のまま。車で30分ほど行ったところで、最初の訪問先、大ヶ口災害公営住宅集集場所に到着。近くに住む十人弱の高齢者たちがすでに集まっていて、さっそく「シニアハーツ教室」のスタートです。

「シニアハーツ教室」では、楽しく頭や手を動かして、健康を保ったり参加者同士の交流を促したりします。数独は、「シニアハーツ教室」の中心になるものですが、その前にまずは計算問題やなぞなぞを出題。意外と難しい(?)なぞなぞで盛り上がったところで、いよいよ数独の時間です。

川上さんが用意した数独は、数独通信の前号に載っていた下の問題な

1	2	8			
	4	3	5	6	
6	5		7	3	
		9	8		7
8	3			1	
	2	5		4	3
			9	5	7
			2	7	9
			4	6	1

今回の数独教室で使われた問題。前号の名作選でも取り上げられた、数独通信1号の1番。

みなさん真剣に数独に取り組んでいます。



いつのまにか、和気あいあい。

ど3問。この数独は、前号の「数独通信名作選」にも選ばれていたもので、載っていた推薦文にも心動かされて今回使用することにしたようです。もちろんニコリの許可済みです。

この問題、数独通信ではすごくやさしい問題になりますが、右上と左下のブロックがまるまる空いているのが難しく感じられたようで、みなさん悪戦苦闘。今回に関しては、もっとたくさんの数字が入った、超初心者レベルの問題をニコリが用意しておけばよかったように思います。

それでも、川上さんの丁寧な、でも時には「ブーッ!」と思いつりダメ出しする熱心な指導の甲斐あって、みなさん正解にたどり着いていました。もちろん私も指導に参加。数字が重複しないように1つずつ確認しながら、ゆっくりと解き進めていきます。1問解くのに時間はかかりましたが、だれもが嫌な顔はせず、数字を入れていくのを楽しんでいたのが印象的でした。

大ヶ口の集会場に1時間ほど滞在したあと、続いて高齢者支援施設「エールサポートセンター」へ移動。ここは仮設住宅の中にある施設所で、学生を招いたりしてさまざまな交流イベントが行われる場所です。今回はもちろんここでも「シニアハーツ教室」を開催。また1時間ほど数独で遊び、大槌町のゆるキャラ「おおちゃん」の手製のぬいぐるみまでい

ただいてしまいました。この場を借りてお礼を申し上げます。

さらにそのあと、我々一行は大槌町役場や地元の町会議員の元を訪ねて、数独の普及について相談。川上さんは、これまで大槌町在住の高齢者約1割に数独を教えてきましたが、これを町全体に広げるため行政への働きかけもされているのです。ちなみに、町内に無料で配布されている「大槌新聞」には、このたびニコリの数独の連載が始まります。

我々はエールサポートセンターに戻り、6日はそこで一泊。翌7日は、町内の吉里吉里地区にある高齢者サポートセンター「ぬくっこハウス」を訪問。ここでも「シニアハーツ教室」を行いました。

近くに住む利用者十数人が集まり、体操のあとで今日もなぞなぞや数独を出題。前日の反省を生かし、この日に配った数独には、数字をいくつか書き足して空きブロックがないようにしていたので、みなさんスムーズに解いていました。

最後は川上さんによる、数独ボードに数字を書き込んでの解き方指導。上はなんと98才の（おがあちゃん）大下さんもいましたが、みなさん本当に数独を楽しんで解いていて、私もいっしょになって楽しみました。

ここで私と後たちは東京へ帰る時間となりましたが、川上さんはさら



数独ボードを使ってのくわしい解説。

にもう2カ所ほどの施設を訪れてから帰京。自宅に着いたのは翌朝だったそうです。

＊

このような活動を隔週で続けている川上さん。外資系半導体メーカー日本法人代表取締役社長を23年間歴任してきましたが、東日本大震災をきっかけに社会事業（ソーシャルビジネス）の道へ。冒頭で述べたように、息子さんと「ソーシャルハーツ」を立ち上げて、被災地を回り始めました。ただ、震災直後はボランティアの人数が多く、受け入れを断られてばかり。そんな中で大槌町にたどり着き、2013年春から活動を開始。当初は、ひと月の半分を大槌町の仮設住宅で過ごし、自宅にいるのは残り半分、という生活だったそうです。

活動し始めたころは、「生涯学習」として多種の教材を取り入れていましたが、2年前に数独を出題したところ、高齢者たちの食いつきがすごく良く、「数字は苦手」と言っていたはずの人が喜んで取り組んでいるのを見て、積極的に数独を取り入れていくようになりました。川上さん自身もちょうどそのころから、自分がやってきたことが地元の人たちの役に立っていることを実感できるようになってきたそうです。

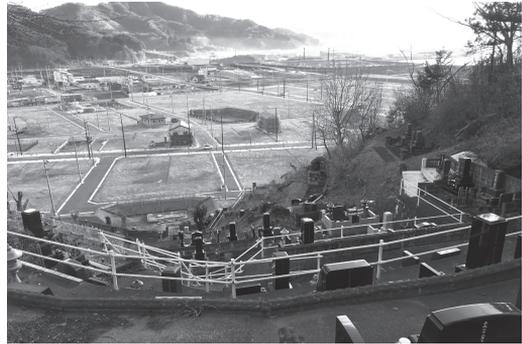
今後は、大槌町でさらに数独人口を増やしていくとともに、他の被災地、さらにはもっと多くの地域でも、数独を広めていくことが目標になっていくでしょう。

ただ、川上さんの地道な活動の一方で、大槌町の復興への歩みは残念ながらスローペース。右上の写真は、かつて町の中心だった地域を撮ったものですが、現在でも更地に近い状況。北隣の山田町と比べても、大槌町の復興は進みが遅いそうです。

また、インフラの整備以上に大変なのが、地域のコミュニティを作り上げること。以前まで築かれていた近所の人とのつながりが震災によって壊され、仮設住宅で新たに隣同士

になった人たちでつながりを築き直すのに時間がかかり、さらに今度は仮設住宅から災害公営住宅に映る高齢者が増加する中で、またつながりを築き直さなければならない。そういったことが続いてまわりの人との関係が作れないまま、ひとりになってしまう高齢者が増えているのが実情です。

です。今後、息の長い支援が必要で、そのために数独が役に立つということがわかってきた以上、大震災前は町の中心地だったエリア。



大槌町での数独の広がりを伝える新聞記事。（読売新聞2016年11月16日）

コリとしても取り組んでいきたいと思えます。しかしながら、災害からほぼ6年経った現在、現地で支援活動をしている人の数は激減していて、川上さんが活動を始めたころは千人単位でいた大槌町のボランティアは、現在は約40人くらいになっているそうです。

今回は川上さんに2日間同行した模様をお伝えしましたが、今後も大槌町からの動きがありましたら、誌面でお知らせしていきます。 ㊞

数独で、つながっていく。